

☒ 災禍の撒き手 ☒ エレノア・ヒューム

☒ 椿 ☒

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつて仲間達と共に世界を救ったエレノア・ヒューム。

そんな彼女は死んだ後、ある世界に転生していた。

それは、灼眼のシャナの世界だ。

今の世界で、紅世の徒に故郷を襲われた。

母が殺され、自身の命も落とそうという時に、突如頭の中に声が響いた。

(・・・殺したい？復讐したい？)

その呼び掛けに彼女は・・・。

原作紹介

灼眼のシャナ・・・アニメ三期で完結しており、約72話。小説は22巻＋番外編。勿論簡潔し

ています。

テイルズオブベルセリア・・・テイルズシリーズ初の主人公のP4ゲームです。復讐を

テーマにした作品です。

投稿は亀更新です。

月に二話を目標にします。(7/8)

灼眼のシャナのSSはとて少ないので、自分で書いてみました。

ベルセリアとシャナを両方知っている方にはとても見やすい作品になっていると思います。

片方にし知らない方でも読めると思います。

口調などがおかしかつたら、どうかお気軽にご指摘ください。

筆者はシヤナの原作読破済みですが大分前のことなので、読み、思  
い出しながら書いております。

ベルセリアは原作クリア済みですが、これも大分前のことなので、  
再プレイしながら書いております。

# 目次

プロローグ	
契約	1
大戦	
出会い	13
君主の遊戯	19
エレノアと仮装舞踏会	26

## プロローグ 契約

「はあっ!! せいっ!! はあっ!!」

木々に囲われた森の中でそんな掛け声と共にブンツ、ブンツと空気を裂く音が聞こえてくる。

その音の出所は一人の少女が振るっている槍だった。

彼女の名はエレノア・ヒューム。

年齢は18歳で、強く凛々しい瞳が印象的な少女である。

艶やかな赤毛を目のあたりの高さでツインテールにし、動きやすいウールの一枚布で作られた服を着ている。

「はああっ!! ……ふう。今日はこれぐらいにしておきますか」

エレノアは息を整えつつ、木にかけてあった布を取り、びっしりとかいた汗を拭き取る。

「今日で18歳ですか」

エレノアは仲睦まじい夫婦の間に生まれた一人娘で、両親の深い愛情を受けて育ってきた。

父を敬い、母を慕い、何不自由なく成長していったエレノアであったが、一つ、彼女には秘密があった。

(前世で私がベルベット達と出会った年齢になったのですね)

彼女には前世の記憶が存在していた。

前世での苦しかったこと、楽しかったこと、様々な記憶が彼女には存在している。

その中でも最も彼女の中で輝くのは、5人の仲間と共に旅した記憶だった。

「短い旅でしたが、とても楽しかったですよ。ベルベット、ライフイセツト、ロクロウ、アイゼン、マギルウ」

エレノアは本当に短く、それでいて最も充実していた日々を思い出し、目に涙を溜める。

それは懐かしさだけでなく、永遠に会えなくなってしまう彼らを

思い出したからだ。

「……思い出に浸るのはこれぐらいにしましょう」

悲しさと寂しさが胸中に渦巻くが、エレノアはその二つの思いを振り払うかのように頭を振る。

そして涙が溜まっていた目に袖を当て、気持ちを落ち着けるために深呼吸をした。

「さて、村に戻りましょうか」

エレノアは槍を右手に、布を左手に持ち、森を抜けていった。

「ん……う？ あれは」

村に戻る途中、木々の隙間から村の方から上がる黒煙が見えた。

ふと、嫌な予感がしてエレノアは走った。

村に近づくと、悲鳴のような声が聞こえ、村に近づけば近づくほどその声は大きくなっていく。

「一体何がっ!!」

彼女は村に何かがあったことを確信し、全力で村の方へ駆け出した。

村についた彼女が見たのは、異形の怪物が村を襲っている光景だった。

「なっ!! あれは……業魔……!!」

この世為らざる者の姿をみて、彼女は前世で敵だった魔物を思い出した。

その魔物は巨大な拳を振るい、村の家々を爆砕し、人間を喰らっていた。

「なぜ業魔がっ!!」

逃げ惑う人々。

中には武器を持って、魔物に攻撃を与えるものもいたが、その人々はことごとく魔物に殺されていた。

そんな光景をつい呆然と見てしまい、エレノアは自身の家族の存在を思い出すのだった。

「——お母さんっ!! お父さん!!」

エレノアは自分の両親を探すため村中を、怪物に気づかれないよう

駆け回った。

「どこっ、何処に居るのっ!! ——あっ……」

人々が幾人か倒れている。

その中に見つけてしまった。

父親の姿を。

「そんな……」

膝から崩れ落ちそうになる。

だが、まだだ。

まだ、母親は無事なはずだ。

そう思い、エレノアは再び駆けた。

町中を駆けずり回る間、彼女は前世を思い出していた。

業魔に襲われた故郷。

何もできなかった自分。

囿になり、犠牲になった母の姿。

前世では失った家族。

だが、今世では……。

——絶対に助けて見せる!!

「何処に居るのっ!! お母さんっ!!」

駆けても駆けても、母親の姿は見えない。

やがて、村を一周しようとした頃、やつとエレノアは母親を見つけ

たが、彼女の母親は魔物に殺される寸前だった。

「このっ!! お母さんを放しなさいっ!!」

エレノアは持っていた槍を怪物の背に突き刺した。

だが。

「——ッ!!」

(刺さらないっ!! やっぱり対魔士の能力がないと……!!)

刃は通らなかつた。

ただの人間には、業魔を倒すことはできない。

それが前世では当たり前前で、この世界でも同様なようだと思つた。

「なんだあ? 鬱陶しいな」

魔物がエレノアに対して腕を一振り。

「ぎやあああああ!!」

槍の柄でガードしたが、その剛腕にふさわしい力にはかなわず、エレノアの身体は吹っ飛び、背中を木に強打してしまう。

「——カハッ!!」

肺から全ての空気が抜け、意識が薄れる中、殺される母親の姿をエレノアは見た。

(ああ……、本当に私は……無力……)

霞む目線の先で、エレノアの母親を殺した魔物が自身の元に向かってくる。

その腕に、たった今殺したエレノアの母親の血を滴らせながら。

(殺したい?)

(えっ?)

朦朧とした意識のなかで突然声が聞こえた。

その声は美しく、そして少しの冷たさが含まれた声だった。

(あの怪物を……、紅世の徒を殺したくない? 復讐のために)

復讐。

それは甘美な響きであった。

友の復讐の旅を思い出す。

自分が復讐を遂げた時を思い出す。

このような存在がこの世に存在することが許せない。

村を襲ったことが許せない。

家族を殺したことが許せない。

復讐。

復讐したい。

(……殺したいです。復讐したい)

(そう。なら私と契約しなさい。そうすれば、あいつを殺す力が手に入るわよ)

(……ひとつ聞きます。業魔は……あいつ以外にも存在するのですか)

(ええ。あいつらの殆どは人を人と思っていない。食料だと思っているわ。いつも人間が苦しんでいる)



(分かりました。契約しましょう。私の復讐と……苦しんでいる人々たちのために)

まずは自分の自己満足のために。

次はこのような存在に苦しめられている人々のために。

エレノアは戦う。

前世と同じように。

立ち上がる。

(ふっ……。じゃあ、行くわよ)

謎の声がそう言った瞬間、エレノアは全身が燃えるような錯覚に陥った。

いや、実際に彼女は赤黒い炎に包まれていた。

(熱いっ!! 何て熱さ!! まるで全身が燃えているよう!!)

エレノアはそのあまりの熱さにギュウウと自分の身体を腕で抱きしめる。

だが、あるのは熱さだけ痛みはなかった。

けれど自分という存在が、すべて燃やされるような感覚をエレノアは確かに感じていた。

それもそのはず。

(今、あんたの人としての存在を、私という存在を入れ込むために燃やしているの。つまりあんたは人間じゃなくなる)

人間ではなくなると聞き、どんな化け物になるか想像しようとしたが、すぐにエレノアはやめる。

姿に意味はない。

大事なものを成すか……。だ。

(そうですか。でも、そうしなければいけないですよね)

(そうよ。紅世の徒を倒すには人の身ではできない。倒すには自分も変わらなくちゃいけないのよ)

(それならそうと言ってくれればよかったのに……)

エレノアは拗ね気味でそう声の主に言った。

(時間がなかったのよ、エレノア)

(なぜ、私の名前を……)

(フレームヘイズは一人で二人。エレノアという存在に入り込むことで、あなたの記憶を読むことができるのよ)

(なるほど。……ああ、確かに感じます。何かが入ってくるのを。これがあなたですね。……とても暖かい)

そして炎が収まり、契約が完了した。

姿形はエレノアのまま、中身は人ならざる者へと成った。

「神器を定めなさい」

「神器？」

「私の意思を表出させるための物よ。武器でも、アクセサリでも好きなのにしなさい。壊れても修復できるから」

「では槍を」

「分かったわ」

ボウツと赤黒い炎が出現し、槍の形をかたどっていく。

長い穂先、金色の鎧、背は幅広く二股に分かれ、柄と穂先の接合部には青い宝石にリボンが結び付けられてあった。

(これは……)

エレノアはこの槍に見覚えがあった。

前世でお気に入りだった槍だ。

「普通だったら名前があるんだけど、私の神器にはないからあんたが決めなさい」

「ではヴァルクリアにします」

「そう、いい名前ね。それじゃあ、手にとって。あいつを倒しなさい、

エレノア」

「はいっ!!」

エレノアは武器を取り、穂先を化け物……紅世の徒へ向ける。

「倒させてもらいます」

その動作をみて、徒は鼻で笑う。

徒がここまで待っていたのは勝てるという自信があったからで、その自信の理由は簡単だった。

「ふんっ。」討滅の道具”め。成り立てがこの俺、”爆砕”ボミウス様を殺せると思うな」

目の前のフレイムヘイズは成り立て。

戦闘経験のない、自在法も使えないフレイムヘイズなど、自身の敵ではない。

ボミウスはそう確信していた。

だが、その確信は誤りであることを、彼は身をもって知ることになる。

「行きますっ!! はあっ!!」

エレノアはまず突きを放つ。

その素早さを予知できなかったのか、ボミウスはその突きを腹にまともに受けてしまう。

「ガハアツ!!」

「せやああああ!!」

エレノアは刺さった穂先をそのまま上に振り上げ、ボミウスの腹から顔にかけて切り裂く。

人間だったエレノアの筋力ならば、到底できない芸当だった。

「ギャアアアアア!!! バ……カ、なあ……」

そしてそのまま振り下ろし、ボミウスを完全に真っ二つにしてしまった。

余りにもあつけない最後だった。

「油断していたようですね」

真っ二つになったボミウスは火の粉となって消えた。

「見事ね」

持っている槍の、柄と穂先の接合部ある青い宝石から称賛の声が聞こえた。

「ありがとうございます」

「で、これからどうするの?」

「はい。まずは皆の弔いをしようと思います」

「そう。じゃあ、それが終わったら話があるから」

「分かりました」

そうして、エレノアは村人たちの弔いを始めるのだった。

弔いが終わり、木陰で休んでいると、宝石から声をかけられる。

「終わったわね」

「はい」

「じゃあ、あなたの状況について詳しく話すわ。その前に……久しぶりね、エレノア」

久しぶりと言われ、エレノアは声の主と一度会ったことがあったかを思い出していた。

が、エレノアは思い出すことが出来なかった。

「……会ったことありましたか？」

「私よ。ベルベットよ」

「……え？　ベルベットって、あのベルベットですか？　ベルベット・クラウですか？」

エレノアは半信半疑で声の主に聞き返す。

「そうよ。フィー、ロクロウ、マギルウ、アイゼン、あなたと旅したベルベットよ。……エレノア、転生してたのね」

ベルベットの発言に戸惑いつつ、エレノアは言う。

「いや……え……。何故ベルベットがここに？　カノヌシと眠ったはずでは？」

「そうなんだけど、気づいたら紅徒にいたのよ」

「紅徒……ですか」

「まあ、まずはこの世界の真実について話すわよ」

エレノアはベルベットから話されないように驚きを隠せなかった。

この世にあるあらゆる存在が持っている、この世に存在するために必要な根元的エネルギーである、存在の力のこと。

紅世の徒という、この世の“歩いていけない隣”にある世界、“紅世”という世界の住人たちが、存在の力を消費することによってこの世に顕現しており、人間から存在の力を奪い、糧とし自らの本質や意思を自在に顕現させ、欲望のままこの世を跋扈していること。

そのことにより、世界に歪みが発生し、この世と紅世の境界線が、ね

じまがり、ひきずれ、荒れ始め、いつか大災厄と称される大きな災い  
が起きると予想されていること。

そんな歪みを発生させる彼らを討伐するため紅世の徒——特に強  
い力を持った紅世の王——は人間に契約を持ちかけ、了承した人間は  
フレイムヘイズという討伐者として、活動していること。

「なるほど。とんでもない世界に転生していたのですね。で、どうし  
てベルベットがこの世界に？」

「分からないわ？ さっきも言った通り、気づいたら紅世にいたのよ。  
確かに私はラファイと眠っていたはずなのにね。もしかしたら、知ら  
ずのうちに死んじゃったとかね」

ベルベットはあっけからんとそう言った。

「そんな……」

「でも、ひとつ言えるのは……今この世界が今の私たちの現実ってこ  
とよ」

「そう……ですね」

エレノアはベルベットに同意するように頷いた。

そして、二人はこれからのことについて話し合った。

旅に出るのは決まったが、フレイムヘイズに成り立てのエレノアの  
ために、まずベルベットはフレイムヘイズの戦い方を教えることにし  
た。

「ひとまずフレイムヘイズとしての戦い方を教えるわよ」

「はい。よろしくお願いします」

「戦い方って言っても、あの世界と変わらないわ。変わる点といえば、  
聖隷術の代わりに自在法っていう霊力じゃなくて、存在の力を用いる  
術よ」

「精霊術の代わりですか」

「そ。じゃあ、まず獣炎の練習でもしましょうか」

「いきなりですか！」

使ったことのない力で聖隷術の再現しろといわれる、エレノアは驚  
きの声をあげる。

「習うより慣れろ、よ。存在の力を練る練習をしながら気長にやりま

しよ。なんせ、もう年は取らないから」

「え！ そうなのですか」

突然のカミングアウトにまた、エレノアは驚きの声をあげる。

「ええ、フレイムヘイズになった人間は年を取らなくなるの。なにせ、フレイムヘイズは自身の“運命という器”を捧げちやっただから」

「私の何かが燃える感覚を覚えたのはそういう訳だったんですね」

ウンウンと頷いているエレノアに、ベルベツトは声をかける。

「とつとと存在の力に慣れて、世界をみて回るわよ」

「なんだか……楽しみしていません？」

じと目で青い宝石を見ながら、エレノアはそう言った。

「仕方ないでしょ。紅世には何も無いんだから」

悪びれもなくそうベルベツトは言う。

実際に、紅世は生きてゆくだけでも過酷な環境で、なにも存在しない世界なのだ。

「はあ。分かりました。早く慣れるように努力します」

ため息と共にエレノアはベルベツトにそう言う。

「ええ。頑張ってね」

励ましの言葉をもらい、エレノアは存在の力に慣れるための修行を開始したのだった。

2週間後……。

「ふう。なんとか全ての聖隷術、いえ、自在法を習得することができました。それにこの腕も」

エレノアは左腕に存在の力を込めると、左腕が異形の腕に変化した。

これはベルベツトが喰魔の時に変化していた業魔手であり、前の世界ならば穢れを食らうという代物だったが、この世界では存在の力を食らうという物になっていた。

つまり、この変化した左腕には自在法をかき消す力があるのだ。

「フレイムヘイズは契約した王の本質と契約者が持つ強さのイメージが何よりも肝心なの。エレノアは私のことをよく知ってるから、その

腕も顕現できると思ったけど、できたみたいね」

顕現とは「紅世の徒」が、この世に実体化することであり、意思やイメージや存在の力を、物質や自在法として実体化させることである。

ベルベットという紅世の王の力の一端を今、エレノアは顕現させているのだ。

「まさか私がこの腕を使うことになるとは思ってもありませんでした」

「使ってみると便利でしょ」

「そうですが……複雑です」

エレノアは微妙にしかめた顔でそう言った。

「で、出発はいつにするの？」

「はい。明日の明朝に出発します」

「そう。じゃあ、今日はもう寝ましようか」

「そうですね」

そうしてエレノアは今生活してる家に入り、寝台に入った。

そして、ヴァルクユリアを傍らに置いた。

「お休みなさい、ベルベット」

「お休み、エレノア」

エレノアは思いの他疲れているようで、すぐに意識を手放した。

朝……。

「さて、行きましょう」

エレノアは服を自在法で前の世界で着ていた改造した聖寮の服を作り出し着て、槍を背負っていた。

そして、エレノアは旅立った。

彼女は「災禍の顕主」ベルベットのフレイムヘイズ、「災禍の撒き手」エレノア・ヒューム。

時には人を助け。

時にはフレイムヘイズを助け。

そして、時には紅世の徒を助ける。

エレノアはフレイムヘイズが持っている、紅徒の徒を倒す使命を持つてはいない。

彼女が持っているのは苦しんでいる者たちを助けるといふ想いだ  
けだ。



## 大戦

### 出会い

契約してから数千年、エレノアは様々な経験をした。

紀元前1000年頃、紅世真正の神、創造神が多くの徒達の望んだ、存在の力をいくら使ってもよい箱庭と言うべき封界“大縛鎖”の創造を阻止する戦いに参加した。

1世紀頃、人間を食べない徒が、徒への復讐に狂ったフレイムヘイズから襲われているのを発見し、徒を救うべく、フレイムヘイズと敵対し、そのフレイムヘイズを殺害した。

11世紀頃、徒達とフレイムヘイズ達の戦いの余波で、ある都市が壊滅状態に陥り、偶然立ち寄ったエレノアはその復興を手助けするが、他のフレイムヘイズからは不思議がられた。

そして16世紀初頭、エレノアはあるフレイムヘイズと邂逅していた。

「初めまして。私、“災禍の頭主”ベルベットのフレイムヘイズ、“災禍の撒き手”エレノア・ヒュームといいます」

エレノアは目の前にいる、火の粉を舞い散らせ、炎髪を靡かせ、煌めく灼眼でこちらを見ている、女性にそう言った。

「私は、“炎髪灼眼の討ち手”マテイルダ・サントメールよ。そしてこっちが“天壤の劫火”アラストール。助けてくれて感謝してるわ」  
マテイルダは指に嵌めた神器を見せながら、自己紹介とお礼を言った。

彼女は隙を突かれ、徒に狙撃されようとしていたが、偶然通りかかったエレノアに助けられたのだ。

「いえ、偶々通りかかったものですから」

「危なかったわね、あなた達」

エレノアとベルベットがそう言うと、遠雷の轟くような声が指輪から聞こえてくる。

「よもや貴様に助けられるとはな、“災禍の頭主”」

「そうね、“天壤の劫火”」

言い合っている二人に苦笑しながら、エレノアとマティルダは会話を始める。

「助けてくれてくれたお礼に、食事でも奢りたいけど、どう？」

「いいのですか？」

遠慮がちにエレノアはマティルダに聞く。

「ええ。もちろん」

「では・・・お言葉に甘えて」

まだ言い合っている二人をよそに、エレノアとマティルダは食事に向かった。

そして、食事が終わる頃にはベルベットとアラストールの言い合いは終わっていた。

「で、二人は知り合いなの」

アラストールにマティルダはそう聞いた。

「うむ。一応、友の一人ではある」

「一応とは何よ」

「ベルベットに友達がいたのですね」

「いちや悪いの」

「いいえ」

前の世界では戦いが終わった後、すぐにカノヌシと眠りについたベルベットは友と呼べる存在は少なかった。

そんな彼女が、紅世で友が出来ていたことをエレノアは嬉しく思い、微笑みながら槍を見る。

そして、同様にマティルダはアラストールの意思を表す神器“コキユートス”を見ていた。

アラストールは“紅世”真正の魔神であり、“神をも殺す神”とも呼ばれてりいる。

創造神が“造化”と“確定”の権能を持っているのに対し、アラストールは“審判”と“断罪”の権能を持つ天罰神だ。

そんな彼は、世界のバランスを守る事に対して極めて強い使命感を

持つており、世界のために同胞、つまりは徒を討つ事もやむ無しと考える徒たちや中立の徒たちは、アラストールの事を戦友や友人としている者が多くいる。

だが、彼自身が友と呼べる者は数少ない。

そんな中の一人がベルベットだ。

「さて、そろそろ出ましようか」

「そうですね」

そうして二人は席をたち、店を出ていった。

「あなた達はどこへ向かっているの」

マティルダがエレノアに問い掛ける。

「ベルベットが西へ行きたいと言うので、西に向かっています」

「欧州の方か。・・・私も着いて行って良いかしら」

エレノアの返事を聞き、マティルダは少し思案した後、そう言った。

「別にいいですけど。何か後用事が？」

「あら、知らないの。とむらいの鐘が都喰らいっていう、町ひとつを存在の力に変えた事件を」

「ええっ！そんなことが起こっていたのですか」

とむらいの鐘とは強大な紅世の王である“冥奥の環”、いまは“棺の織手”と名乗っている、アシズを首領とし、“九垓天秤”と称される9人の最高幹部である強大な王によって統べられている、中世当時最大級の徒の大集団であり、そんな彼らが町ひとつを存在の力に変換し、莫大な存在の力を手にしたというのが、都喰らいだ。

エレノアは驚愕し、驚きの表情を顔に出してる。

「フレイムヘイズの間では結構噂になってるはずなんだけど」

「知りませんでした」

エレノアはガクリと項垂れた。

普通のフレイムヘイズは復讐のため、非日常に身を置いているが、エレノアは人助けのため、日常に身を置いているので、なかなか他のフレイムヘイズとの交流がないのだ。

「とうとう冥奥の環が動き出したって訳ね」

「・・・アシズ」

ベルベットとエレノアはアシズとは面識がある。

彼の契約者であったティスはとても優しい少女で、エレノアは昔、彼女と何度も共闘した。

そんな彼女は人間の裏切りによって突然の死に至った。

人間たちはティスに何度も助けられながら、その力を恐れ、徒との戦闘で大いに疲弊していたティスを殺したのだ。

エレノアはその愚かな計画を聞き、駆け付けたが、時すでに遅く、ティスは殺されていた。

そしてアシズは彼女の喪失を恐れて自在法『静なる棺』でティスの崩壊を防ぎ、同時に周囲の人間を喰らって『存在の力』を確保、ティスの存在という「この世でただ一つ、心通じた場所」を基点に、神威召喚の手法を応用して自らをその場に再召喚し、顕現した。

「災禍の撒き手・・・か」

「・・・アシズ」

「・・・遅かったようね」

アシズは青い火の粉を撒き散らしながら、巨大で優雅な翼と細くも逞しい体躯を持ち、仮面を付けた青い天使の姿で、髪は羽根のように広がり、二本の角が鋭く突き出ている。

「お前が早く来ていればっ！ティスはっ！私たちの愛がっ！失われることはなかったっ！」

アシズとティス。

二人は愛し合っていた。

徒と人間という、あまりにもかけ離れた種族であるが。

確かに、二人は愛し合っていた。

「すみません」

エレノアは友の死に悲しみを、アシズの慟哭の訴えに後悔を感じながら、目に涙を浮かべながら、そう言った。

「・・・いや、私が悪かった。駆け付けてくれたことを感謝する」

アシズは人間を喰らった。

エレノアにとってそれは悪だ。

しかし、この場合はどうだろうか。

人間たちの身勝手な行動でティスは死んだ。

復讐しようとしても仕方ないのではないだろうか。

人間たちに罪を償わせればよかったと、アシズに言うべきなのか。

それは、無責任だろう。

愛するものを失った気持ちでエレノアは抱いたことはない。

そんな事を口に出す資格はなかった。

「私は・・・ティスを甦らせる」

アシズはポツリとそう言った。

「そのために世界を巡るつもりだ。お前はこうする。人を喰った私を、ここで討滅するか」

「ティスに・・・触らせて下さい」

「・・・いいだろう」

そうして、アシズは棺を出現させる。

棺の中は青い花で敷き詰められており、中心には美しい少女が眠るように、横たわっていた。

額には金環を嵌めており、髪は青く、腰まで届き、おでこをさらしており、一本だけ長い髪の毛がおでこ髪の境目から出ている。

服は修道服のようなもので、その服からは少女らしい、細く繊細な体が浮き彫りになっており、手は祈るの時のように組まれている。

「・・・ティス。貴女との旅、楽しいものでした」

エレノアは棺のもとまで行き、屈み、棺の中のティスの手を掴み、目を瞑り、そう言った。

数秒ほど経つと、エレノアは立ち上がった。

「この場のことは、仕方のないことでした。しかし、次は見逃しません」

「・・・感謝する」

もし、この場でエレノアと戦っていたら、アシズは討滅されていた

であろう。

彼はまだ万全の状態ではない。

「次はおそらく敵同士だ」

「そうでないことを祈っています」

そうして、アシズは去っていった。

エレノアはそこに小さな墓を作った。

墓にはこう記してある。

我が友にして、英雄ティス。ここに眠る・・・と。

## 君主の遊戯

エレノアとマテイルダは欧州に赴き、“都喰らい”事件後、その勢いのままにフレイムヘイズ達を完全殲滅するべく追撃戦に入っていた“九垓天秤”の一角、遊軍首将であった“戎君”（じゅうくん）フワワと交戦。

激闘の末、討ち取り、彼らは“とむらいの鐘”に宿敵と認識され、何度も彼らと戦火を交えた。

そんな彼らにとあるフレイムヘイズが接触していた。

「貴女が……」炎髪灼眼の討ち手”。そして“災禍の撒き手”でありますか」

そのフレイムヘイズは端正な顔つきで、能面のごとき無表情が特徴の女性だった。

戦闘には向かない、貴族風の美しいドレスを着ており、彼女はその豪奢を下品に見せない風格を自然に纏っている。

「ああ。貴方は確か……」

エレノアは彼女を見たことがあるのか、彼女の姿を見て、反応する。

“夢幻の冠帯” ティアマトーのフレイムヘイズ、“万条の仕手” ヴイルヘルミナ・カルメルであります」

「初見」

額にある、宝石を添えた飾り紐型の神器“ペルソナ”から短く平坦な声が発せられる。

その声は彼女と契約している紅世の王“夢幻の冠帯” ティアマトーのものだ。

「へえ。貴方があの戦技無双の舞踏姫ね」

ヴィルヘルミナの“万条の仕手”としての能力は白いリボンを作り出し自在に操ること。

リボンは存在の力で強化されているため、布のように柔らかく軽く動きながら、鋼のような硬さを持ち、全力状態では万条の名のとおり万単位の膨大なリボンを噴出する。

これを剣山のようにして相手を串刺しにしたり、自在式などを盛り

込むことで、戦闘では様々に応用される。

加えてヴィルヘルミナ自身の技量として対象の力の流れや動きを見切り、合気道のように逸らし、回し、投げ飛ばすことができ、”万条の仕手”の能力であるリボンと合わせることで、相手の大きさ、パワー、重量など関係なく、多くの敵を屠ることができる。

そしてその投げ技こそが『戦技無双の舞踏姫』の異名の由来である。格闘戦においてはフレイムヘイズの中でも最強の域に位置する彼女は、しかしながら、どちらも直接的な破壊には関わらない能力であるため、破壊には炎弾や簡単な自在法による爆破などに頼らざるを得ない。

「で、私たちに何か用かしら」

マティルダがヴィルヘルミナにそう訪ねる。

「はい。貴方たちと行動を共にしたく、訪ねに来たのであります」

「共闘」

「それは心強いですね」

「ええ。これから戦は激しくなるわ。力強い味方は多い方がいい」

エレノアとマティルダはヴィルヘルミナの提案にすぐさま、了承の返事をした。

「じゃ、これからよろしくね」

マティルダはヴィルヘルミナに手を差し出す。

「・・・ええ」

ヴィルヘルミナはマティルダの手を取り、力強い握手を交わす。

(マティルダ・サントメール。見極めさせて貰うのであります)

(イタタタ……。私、彼女に何かしたのかしら?)

こうして三人にして六人は行動を共にするのであった。

アシズが都喰らいを起こして18年後。

行動を共にしてからも、何度も”とむらいの鐘”と戦っていたエレノア、マティルダ、ヴィルヘルミナを旗頭に”とむらいの鐘”に対し、バラバラに行動していたフレイムヘイズ達が集まりだし、彼らと決戦



をするためにフレイムヘイズ兵団が結成された。

総大将には“私の雷剣”タケミカヅチのフレイムヘイズである、“  
震威の結い手”ゾフィー・サバリツシュが選出された。

ゾフィーは見た目が40過ぎの修道女で、優れた討ち手からも女傑として一目置かれていたが、口調や振る舞いにどこか稚気があり、歳に関係のない可愛さも感じさせる。

タケミカヅチの意思を表す神器は、額に四芒星の刺繍のあるベール型の“ドンナー”。

その高い能力と面倒見のよさから、満場一致で総大将に選出——押し付けられた——彼女は総大将として多くのフレイムヘイズを導き、一歩一歩、確実に“とむらいの鐘”を追い詰めていった。

そして今、フレイムヘイズ兵団は“とむらいの鐘”との決戦の前準備を行っていた。

「それは“君主の遊戯”に混乱を起こすことだ。

”君主の遊戯”とは各地に根付き、勢力を張っている“紅世の徒”の大組織による代理戦争協定だ。

欧州をゲーム盤に見立て、国や伯領、教皇領に莊園を“陣地”、君主や司教を“紅世の徒”が操り、“駒”とし、その見立て領地を興亡と衰勢によつて互いの勢力圏の線引きをしており、この“君主の遊戯”は常に“徒”の大同盟になりうる危険性を孕んでいた。

ゾフィーは“とむらいの鐘”に決戦を挑む前に邪魔になるかもしれない“君主の遊戯”に混乱、または決戦地であるブロッケン要塞の周囲の組織を一掃する作戦を立て、その実行者をエレノア、マテイルダ、ヴィルヘルミナの三人にして六人に指名した。

「ほんつと、あの肝っ玉母さん。人に厄介事ばかり押し付けて」「まあまあ」

ぼやいているマテイルダにエレノアが宥める。

(楽しいくせに・・・)

ヴィルヘルミナはマテイルダがこの戦いに楽しさを感じていることに気づいていた。

もちろんエレノアも気づいているが、これは性格の違いだろう。

現在、三人は”君主の遊戯”の”遊戯者（プレイヤー）”の一人である”盤曲の台”ゴグマゴグが率いる”巖楹院（ミナツク）”の本拠地を強襲していた。

山々に囲まれた盆地の中央にある、まっ平らな大岩の上にある要塞の城門を突破し、要塞の中にいる。

「じゃあ、手筈通りに。盤曲の台は私が、城外は貴女達に任せらるわ」  
「ええ、任せてください」

今回の作戦はマテイルダが内部にいるゴグマゴグを討伐、エレノアとヴィルヘルミナが外にいる徒の内部への侵入を阻止する、というものである。

「一人で平気でありますか」

「多分ね。まさか奴らほどの手練れって事もないでしょ」

「奴ら？」

ヴィルヘルミナが訪ねる。

「ええ。」とむらいの鐘”の幹部ども。”九垓天秤”  
「……！」

ヴィルヘルミナの頭にはとある男が浮かんでいた。

精悍な顔付きの、軽装の騎士の様相をした長髪的美青年の姿が。

「？、ヴィルヘルミナ？」

「い、いえ。何も……」

「まだ敵は残ってるわよ。気を付けてね”戦技無双の舞踏姫”」

「……了解であります」

（私としたことが……。戦の最中に余事に心を奪われるとは）

「私には一言ないのですか」

「エレノアは大丈夫でしょ」

「はあ。油断はしないでくださいよ」

「はいはい」

そう言っつて、マテイルダは要塞の中に入っていった。

（敵を倒すことに専念するのであります）

「油断大敵」

「で、ありますな」

「敵が来ましたよ、ヴィルヘルミナ。私は右側を回ります。貴女は左を」

「了解であります」

エレノアとヴィルヘルミナは自身たちを囲っている敵兵、紅世の徒、に向かっていく。

(そう、今は、敵を倒すことに集中)

ヴィルヘルミナは飾り紐型の神器“ペルソナ”を仮面に変え、被り、敵と戦いを始める。

万丈のリボンが敵に襲いかかった。

「せえあつ！」

「ゴハアツ！」

「ゴペエ！」

「ガハッ！」

神器“ヴァルキュリア”の一振りで、エレノアを囲んでいた敵が火の粉となつて散っていく。

「はあつ！」

「ギヤア！」

「ホゲエ！」

前進しながら高速の突きを複数の敵にお見舞いし、次々と討滅していく。

「雑魚ばかりね」

「そうです…：…ねっ！」

「アギヤアツ!!」

ベルベットと話している最中に襲ってきた敵を縦に一閃する。

「けど数だけはいわね。弱いからって油断しちゃダメよ、エレノア」  
「分かっていますよ、ベルベット」

エレノアは城外を回りながら、襲いかかる敵を殺していく。

「連なれ真紅！霊槍・獣炎!!」

詠唱に存在の力を込め、自在式を紡ぎ、自在法を発動させる。

自在法” 霊槍・獣炎”。

突き出した槍先から赤黒い魔方陣のようなものが展開し、そこから大きな火球が三発放たれる。

「ギャアアツアアアツアツツ!!!」

「ウワアアア!アアアアア!」

敵に着弾した瞬間、火球は爆発し、多くの敵を巻き込んだ。

「描け蒼穹!・霊槍・氷刃!」

自在法” 霊槍・氷刃”。

槍先から放射状に氷刃が3連続で放たれる。

「は、速えっつ!ガハアツ!」

「ウゲエエエ!」

氷刃の鋭さは”徒”たちの体を容易く切り裂き、突き抜け、放たれた氷刃以上の敵を屠る。

「貫け緑碧!・霊槍・空旋!」

自在法” 霊槍・空旋”。

槍先から竜巻を生み出し直線状の敵を巻き込む。

「ウアアアアツアアアツアア!!」

「助けッ!アアアアア!!」

竜巻に巻き込まれた徒は風の刃にズタズタに引き裂かれ、見るも無惨な姿を曝す。

「ハアアアツ!」

エレノアは槍を使って空中に飛んだ。

「蔓落ッ!」

そして踵落としを徒にお見舞いする。

「グガッ」

「とっ、六行六連!」

着地した瞬間、エレノアは技を繰り出し、流れるように槍と蹴りの六連撃をお見舞いし、敵が散る。

「これで終わりですッ!雷牙轟閃!!天に轟け藤黄!霊陣・雷散!」

存在の力を槍に大量に込め、槍を振りながら一回転し、自身を中心に激しい雷を周囲に振り撒く。

さらに、自在法” 靈陣・雷散” を放ち、自身の前方広範囲に雷撃を連続で落とす。

「ウギャアアアアアアアアアア!!!」

大量の悲鳴が響き渡り、多くいた徒の姿はなくなり、その場にはエレノアのみとなった。

「ふう。これで終わりですね」

「本当、アンタ存在の力の総量多いわね。あっちの世界じゃ、これだけ力を使ったらバテちゃってるわよ」

「そうですね。向こうでも力を込めれば込めるほど威力は上がってましたが、ここまで込めると一戦しか持ちませんでしたよ」

「エレノアが人間のままだったら、どんな偉業をなしていたのやら」

「フレイムヘイズの” 存在の力” の量は、人間だった時の「運命という名の器」の大きさが最大値となる。

王族などの世への影響力が高くなる可能性のある者は器も大きい傾向があり、エレノアは数多くいるフレイムヘイズの中でも、存在の力の量は誰の追隨を許さぬ程の量を保有していた。

「さて、ヴィルヘルミナと合流してマティルダの元に向かいましょう」

「そうですね」

そう言って二人はこの場を去った。

” 徒” たちが残した、火の粉を後にして……。

## エレノアと仮装舞踏会

「ここを突破して大将に花道を開くんだっ!!」

軽装の鎧をきた者達が剣や盾、弓を持ちながら、森の中を疾走していた。

その眼前には異形の者達がいる。

“紅世の徒”だ。

疾走していた者達は“フレイムヘイズ”。

今この森は戦場となっていた。

「喰らえっ!」

フレイムヘイズ達は一齐に徒達に攻撃を仕掛ける。

しかし……。

「何っ!」

その攻撃は木々に阻まれる。

よく見れば、その木々はまるで石のような色をしている。

「石の木……だと。っ!」碑堅陣” かつ!!」

「くっ!」

「敵はどこだ」

フレイムヘイズ達は木々に囲まれ、徒の姿を見失ってしまった。

(成る程……。この大戦を迎えるにあつたて、即席の雑兵ばらにも我が偉大なる力を周知させている、と言うわけか)

そんな右往左往しているフレイムヘイズ達を木々に紛れ込みながら見ている者がいる。

“九垓天秤”の一角、先手大将 “焚塵の関” (ふんじんのせき) ソカルだ。

彼は石の木々による防御陣の自在法 “碑堅陣” の使い手だ。

人格面では “九垓天秤” 内でも際だって評判が悪く、見栄っ張りかつ嫌味であるが、戦闘面における周囲からの信頼は厚く、ゾフィーに「奢って当然の戦上手」と言わせる程に戦に長けている、負け知らずの将である。

「くっく。しかし、ただ知ったところで我が “碑堅陣” を破ることな

どできはせぬ」

そして、いつの間にかフレイルムヘイズ達は徒に囲まれていた。追いかけていたのが、まんまとおびき寄せられていたのだ。

「いつの間になんた！退路も絶たれて・・・」

「それなら空はっ！」

何人かの者達が上を見上げるが、そこには飛行している徒達がいる。

「ツツツ!!」

「殺せええええ!!」

動揺していたフレイルムヘイズ達は瞬く間に徒達に殺され、徒達の勝利の咆哮が響き渡る。

「うおおおおおおおお!!」

「ソカル様万歳！」

「万歳」

「万歳!!」

戦闘が起こった後方では、一人のフレイルムヘイズが腕を組み、苛立ちながら立っていた。

「ちっ。また呑まれたか」

そのフレイルムヘイズは髭を生やし、西洋甲冑を着た青年で、殺されたフレイルムヘイズがいた森を険しい相貌で見つめていた。

彼は“極光の射手”カール・ベルワルド。

彼はフレイルムヘイズ兵団で、副将を勤めており、ベルワルド集団を率いている。

契約している王は破暁の先駆“ウートレンニヤヤと”夕暮の後塵“ヴェチエールニヤヤという一つの体に二つの人格があるという珍しい王だ。

そんな彼らの意思を表すのは鏃型の神器“ゾリヤー”。

「大喰らいの枯れ木野郎め」

カールは忌々しそうに、森を睨み付け、副官に指示を出す。

「第四波は揃ってるな？突撃だ」

その指示に副官は難色を示す。

「ですが大将、三度の突撃で誰一人として戻ってきません。いくら規定の作戦とはいえ、真正面から“焚塵の関”にかかるのは」

「まだ足りん」

「は？」

副官の警鐘をカールは遮り、言う。

「この作戦はやつの防御陣を突破する、最短の距離と機会を捉えるためのもんだ」

ソカルは深い森に“碑堅陣”を敷き、潜伏中だ。

森の背後には、なだらかな山々からなるハルツ山地があり、その山地の中でも一際、大きな波として膨らんでいる、主峰であるブロッケン山。

その山頂にある台地に“とむらいの鐘”の本拠地であるブロッケン要塞が築かれている。

つまり、ソカルを抜くことができれば、敵の本拠地まで一駆けで行くことができる。

本来であればソカルの背後には中軍主将である“九垓天秤”の一人、“天凍の倶”（てんとうのぐ）ニヌルタがいるのだが、彼は5日前に大戦の発端となった宝具争奪戦のなかで討滅されている。

「前衛を磨り潰すつもりで出方を見、最新の注意を払って動静を探る。それがゾフィーの命令だったろう？」

カールがそう言うと、腰につけている矢筒に入っている二つの矢からウートレンニヤヤの艶っぽい女性の声とヴェチエールニヤヤの軽くはしゃいだ少女の声がする。

「この防御陣を崩すには森の奥に潜む一匹を見つけてぶっ殺しちゃう以外にないでしょ？」

「それもあの森が押し寄せて私たちの戦列を崩壊させる前にね。多少の人死ににビビってなんかいられないわ」

「は、はあ」

「だが、確かに・・・」

カールは鎧をトントンと指で叩きながら思案する。

「これじゃ、埒があかねえな」



そして、カールはある作戦を思い付く。

「いつそのこと、全部ぶつけるか。．．．ん？名案じゃねえか」

「ゾフィー総大将の作戦はっ?!」

副官はカールを止めることはできず、全軍で森に突撃を開始したのだった。

「はあああ。心配です」

エレノアはため息混じりにそう言った。

ここはベルワルド集団が展開していた地域から数キロメートル右方に離れた場所にある、総大将ゾフィー・サバリツシュが率いる、サバリツシュ集団がいる天幕だ。

サバリツシュ集団は敵の動きをよく見ることができる高台に布陣している。

「エレノア、少しは落ち着いたらどう?」

「でも、ベルベット。私は心配なんです。カールが」

「カールというよりはアイツが率いている兵たちの心配でしょ」

「ええ、そうです。またカールが突撃、突撃と言っているような気がして。一応、出陣前に言い含めておいたのですが」

「そんなことしてたわねえ。まあ、無意味だと思っけど」

「やっぱりそうですよね。ああ、私も同行すれば良かった」

エレノアはカールの気性を理解し、それ故に戦果は出るだろうが、兵が多く死ぬことを心苦しく思っていた。

「貴方たちは彼らが動いた時の切り札なのですよ。もし仮にも彼らが動けば私たちでは対処できませんからね」

そこにゾフィーが苦笑を浮かべながらやって来た。

「確かに」 仮装舞踏会 (バル・マスク) が動けば全滅は免れません。でも彼らは動かないと思いますよ」

「その根拠は?」

取り澄ました男の口調をしているタケミカツチがそう問いかける。

仮装舞踏会とは世界最大の規模を誇り、他の大集団とは頭一つ二つ

抜きん出ている徒の大集団で、桁外れの規模の兵力、一騎当千の実力を持った錚々たる顔ぶれの将帥らを数多く揃えている。

彼らは〃とむらいの鐘〃の要請を受けての参戦であるが……。

「彼らの真の狙いはアシズの〃壮拳〃とは別にあると思うからです」

壮拳とは〃紅世の王〃アシズと〃棺の織り手〃テイスの存在を分解し、寄り合わせ、定着させることで〃両界の嗣子〃、簡単に言えばフレイムヘイズと〃紅世の王〃の子供、なる存在を誕生させる事を目指したもので、フレイムヘイズは〃壮拳〃を〃暴拳〃と呼び表していた。

なぜなら、〃壮拳〃が達成された場合、それを模倣しようとする〃徒〃が大挙出現することを恐れたためだ。

「あの三人が揃って出陣していますしね。ただ参戦するだけなら他の将帥を派遣すればいい話ですから」

「なるほど。流石、〃仮装舞踏会〃の好敵手。彼らの思惑は全てお見通しと言うわけですか」

「全てとは言いませんけど」

「あながち間違っていないと思うわよ」

エレノアとベルベツトは確信を持ってそう言った。

一方、エレノアが言っていた〃三人〃もエレノアについて話していた。

「〃災禍の撒き手〃は本陣に籠っている……か」

「そのようだね」

天幕の中では漆黒の鎧に身を固めた大男と灰色のタイトなドレスに装飾品をいくつも付けた、妙齢の美女が話していた

大男は大槍を肩にかけ、美女は額の一つを加えた三眼だが、右の眼には眼帯を付けている。

「恐らく我らに対する手札として温存しているのだろう」

「だが奴も気付いている筈だ。俺たちが動かないことをな」

「そうだろうね」

二人が話している内容を聞いていた三人目である、黒材の輿の上にいる、少女がポツリと呟いた。

「彼女がこの場に……」

少女は白く大きな帽子とマントに着られている程小柄で、眠るような自然さで相貌を閉じ、力なく前に下げた両手で錫杖を横一文字に携えている。

「気になるかい」

「いえ。別に。ただ……彼女はいつか我々にとって危険な存在になるかもしれません」

少女は表情を変えず、美女にそう言った。

三人は“仮装舞踏会”を取り仕切る三柱の強大なる“紅世の王”。一人目が“軍師”である“逆理の裁者”（ぎやくりのさいしや）ベルペオル、二人目が“將軍”である“千変”（せんぺん）シユドナイ、三人目が“巫女”である“頂の座”（いただきのくら）ヘカテー。

彼ら三人は通称“三柱臣”（トリニテイ）と言いい、彼らは主不在の仮装舞踏会を取り仕切っている。

「そうだね。“災禍の撒き手”はたった一人で何度も我々と相対してきたからね。仮装舞踏会の好敵手なんて言われるほどに」

「だからこそ、奴には盟主の理想を何度も伝えることができた」

「シユドナイを通して盟主の理想、いや、多くの徒達が望んだ存在の力をいくら使っても良い世界を、あの時とは別の方法で作ることを。“災禍の撒き手”をこちらに引き込むことができれば、“大命”の障害は取り除くことができるだろうね」

エレノアはフレイムヘイズ、徒の間ではかなり有名で、今まで生きているフレイムヘイズの中でも彼女は最古のフレイムヘイズの一人である。

彼女はその人生の中で様々な経験を積んできた。

徒と戦うことは勿論、フレイムヘイズとも戦ったこともあり、フレイムヘイズの使命である歪みを発生させる徒を殺す、世界のバランスを守ることを平然と破る、異端中の異端。

エレノアにとって世界のバランスを守ることは二の次だ。

彼女は今を生きている人々を徒、もしくは復讐に走り、人々に被害を与えるフレイルムヘイズから守るために契約したフレイルムヘイズである。

エレノアは力を持たない人々を守るためなら何だってするだろう。

そう、徒とも手を組むだろう。

彼女の前世の経験がその決断を後押しする。

「まあ、まだまだ時間は掛かるだろうがね」